

「MC母ちゃん」

石川
宙人

登場人物

木川田玲奈（17）
ナ）
女子高生ラッパー（MCネームは「レイ

木川田典子（47）
玲奈の母

木川田一徹（48）
玲奈の父

MC高尾山（22）
玲奈の彼氏

ILL-619

D J ユーダイ

チカ

メイ

中島先生

光浦先生

仲井戸先生

ラッパー①

○ライブハウス・ステージ上（夜）

フリーラップバトルが行われている。

司会「DJユードイ、bring the beat!」

DJユードイ、ビートを流す。

ILL-619「（ラップ） yeah! おまたせILL-619

の時間だ 行くぜこいつを今から痴漢だ

完全勝利で行くぜ居酒屋 敗戦処理をしな

いといかんな」

目の前のILL-619をキッと睨む木川田

玲奈（17）。

ILL-619「（ラップ）お前女子高生だってな？

こんな女に負けるわけねえんだよ キレた

俺は制御不能 今からお前を戦闘不能」

フロアから歓声上がる。

玲奈「（ラップ）はあ？ 私が戦闘不能？

成し遂げるぜ私が前人未到 女子高生だか

らなんだってんだよ 年齢とか性別とか関

係ねえんだよ お前に負ける？ ありえね

え お前が優勝？ なしえねえ 今からお

前のお口チャック めちゃくちゃダサくな

い？」

フロアから歓声上がる。

HL-619 「(ラップ) 年齢も性別も関係ねえよ
だけどお前と俺とじゃ格が違えよ！」

フロアから歓声上がる。

HL-619 「(ラップ) わかってんのか？ お前
は身の程知らずの自信過剰 そんなやつに
は見せつけてやるぜ 俺のやべえスキルに
びびんなよ？ 強がりなお前は単なるピエ
ロ 今すぐここから消えろ」

フロアから歓声上がる。

玲奈 「(ラップ) やべえスキルにびびんな
よ？ 私のスキルにチビんなよ！」

フロアから歓声上がる。

玲奈 「(ラップ) 誰がピエロだって？ かか
せてやるぜ赤っ恥！ 私こそがやべえナン
バーワンラッパー 今日こそ決めるぜ絶対
王者 教えてやるぜ何回も お前は馬鹿だ
単細胞」

司会 「終了ー！」

大歓声上がるフロア。

司会「それでは判定に移ります。先攻、III-

619 がよかったと思う人！」

疎らな声援。

III-619、負けたとばかりに苦笑いを浮

かべる。

司会「後攻、レイナがよかったと思う人！」

大声援。

当たり前といった表情の玲奈。

司会「勝者、レイナ！」

大喝采。

玲奈、それに手を挙げて応える。

○メインタイトル

『MC母ちゃん』

○高校・全景

○同・教室

三者面談中の教室。

並んで座る玲奈と木川田典子（47）。

玲奈は制服だが、髪は編み込まれピアスをするなどストリート系。

典子「先生、先に謝っておきますわ。うちの子が本当にすみません。なんだかこんな感じに仕上がっちゃいましたねえ」

中島先生「いやいや、個性があることはいいことですから」

典子「ヒップホップっていうんですか？ 小さい頃から飛んだり跳ねたりする音楽が好きみたいですねえ」

気怠そうな玲奈、ガムを口に入れ、くちやくちや噛み始める。

典子「！ ちよつとあんた！ 先生の前でガムなんて食べるんじゃないわよ！ 出しなさい！」

中島先生「あ、大丈夫ですよ。いつものことなので」

玲奈「ナカジがいつつってんだからいいじゃねえか」

典子「あんた！ 先生のことあだ名で呼ぶんじゃないわよ！ 謝りなさい！」

中島先生「あ、大丈夫ですよ。いつものことなので」

典子「ちよつと先生！ なんで怒らないの！？ そんな色白で弱々しいから舐められるのよ！ ほら、叱ってみなさい！」

中島先生「え？ あつすみません」

典子「すみませんじゃないの！ 叱りなさいって言うてるの！」

玲奈「いいじゃねえかナカジが大丈夫だって言うんだから」

典子「あんたは関係ないでしょ！ このままだと一生この人は舐められたまま色白で生きていくのよ」

中島先生「色白はどうしようもないと思うんですが」

典子「ほら、叱ってみなさい！」

中島先生「あっはい。えーと、（無感情で）
こら、ダメだぞ」

典子「もつと厳しく！」

中島先生「こ、こら！　ダメだぞ」

典子「もつと！」

中島先生「こらあ！　ダメだぞ！」

玲奈「なんだ、ナカジ怒れんじゃん」

典子「ナカジじゃないの！　中島先生って呼

びなさい！」

玲奈「嫌だよ。ナカジはナカジだもん」

典子「ほら、先生は怒る！」

中島先生「こらあ！　ダメだぞ！」

光浦先生「（前扉から様子を伺うようにし

て）中島先生、どうされましたか？」

中島先生「あっ違うんです！　これは、あの、

色々と訳がありました」

光浦先生「大丈夫、なんですね？」

中島先生「全然大丈夫です。全然怒ってない

ですから」

光浦先生「はあ……」

典子「（愛想良く）うちの子がお世話になっ

ております」

くちやくちやとガムを噛む玲奈。

光浦先生、典子に会釈をして立ち去る。

中島先生「あの、そろそろ本題に移ってもいいですか？」

典子「うちの子、何かやらかしましたでしょうか？」

中島先生「こちらを見て頂きたいんですけど」と1枚の用紙を差し出す。

用紙には、「全国统一模試」とある。

典子「なんですかこれ？」

中島先生「先日行われた全国模試なんですけど、実は玲奈さんが全国で1位を取ったんです」

典子「え……」

くちやくちやとガムを噛む玲奈。

○木川田家・全景（夜）

○同・ダイニング（夜）

湯気を立たせるすき焼き鍋。

食卓を囲む、玲奈、典子、木川田一徹
(48)。

典子、菜箸で鍋の野菜などをいじりながら、

典子「さあさあ、たーくさん食べるのよー」

何かに目を留めている一徹。

視線の先にある玲奈の器には、卵が3つも割ってある。

玲奈「頂きまーす」

玲奈、卵3つをかき混ぜる。

一徹「お母さん、何かあったのか？」

典子「今日はお祝いななのよ」

典子、どこかへ行った後、すぐに用紙を手に戻って来て、

典子「なんと！ 玲奈が全国模試で1位を取ったの！ ほらお父さん見てよー」

典子から用紙を受け取った一徹、眼鏡を外して用紙に目を遣る。

用紙に書かれた科目別ごとの1位や2位の数々。

玲奈、鍋から肉だけを取り、たっぷりの卵の液に浸して食べる。

一徹「こりやすくないな」

典子「すごいでしょ？ 前々から勉強が出来ると思ってたけど、全国で1位になるとはあっぱれね。だってお父さん、日本一なのよ？ 体操界でいう内村航平よ！ お笑界面でいう明石家さんまよ！」

一徹「ん？ そうなのか？」

典子「（一徹の器に取り分けながら）そうよー。担任の先生曰くね、このまま行けば早慶上智は間違いないだろうって。もしかしたら東大だって狙えるかもしれないっていうのよ」

典子、一徹に取り分けたすき焼きを手渡す。肝心の肉が入っていない。

一徹「あら、肉が入ってないぞ」

典子「お父さんはお肉は食べなくていいのよ。コレステロール値高いんだから。ほら、あんたは食べなさい」

と菜箸で玲奈の器に肉を入れる。

一徹、鍋の中に残る最後の一枚の肉に箸を伸ばすが、典子がかすめ取って自分の器に入れてしまう。

一徹「……」

典子「東大は個性的な人が多いってなんかテレビでやってたけど、あんたにはぴったりじゃない。あんたは雇われる方じゃなくて雇う方なのかもしれないわね」

一徹、すき焼きの野菜を食べる。

典子「社長にでもなったらちゃんど私たちに仕送りしてよね。良かったわねお父さん、私たち将来安泰よ。旅行も行きたい放題じゃない。で、あんたは行きたい学部とかあるの？」

玲奈「私、大学行く気ねえよ」

すき焼きを食べ続ける玲奈。

典子「……え？」

玲奈「高校卒業したらラッパーになっから」

典子「ラッパー？」

玲奈「そう。別に勉強したいことなんかねえもん」

間。

典子「な、何言ってるのよ。あんたは内村航平であり明石家さんまなのよ？ そんな人たちがラッパーになんかならないでしょ？」

玲奈「ラッパ界の明石家さんまになるよ」

典子「なにがラッパ界の明石家さんまよ。」

あんた世の中舐め過ぎよ。人生ってそんな甘いもんじゃないのよ。ちゃんと大学行って、ちゃんとした仕事に就かなきゃ食べていけないの。わかる？」

玲奈「そんなことねえよ。ラッパで食べる人だっているじゃん」

典子「そんな人は一握りなの。誰もがラッパで食べて行けるわけじゃないでしょ。ほら、お父さんも食べてないでなんか言ってるよ」

一徹「ん？ まあそうだなあ。玲奈が行きたくないって言ってるしなあ」

典子「なんでお父さんまでそんなちゃらんぽらんなこと言うのよ！ そんなだから出世できないのよ！」

一徹「それは関係ないだろ」

典子「いい玲奈、お父さんは48歳なのに未だに平社員なの。月給32万円でボーナスもたまにしか出ないの。しかも腹も出て加齢臭もひどいの。こんな人と結婚したい？」

一徹「ちよ、ちよっとお母さん」

玲奈「したくねえ」

一徹「おい玲奈」

典子「こうなりたい？」

玲奈「なりたくねえ」

一徹「お、おい」

典子「だったら良い大学に行くの。弁護士でも医者にならねばお父さんみたいにはならないから。あんたは全国模試で1位なのよ？ 大学には絶対に行きなさい」

玲奈「行かねえって。何百万も払って勉強するとか馬鹿っしょ」

典子「あんた、もしかしてお金のこと気にしてるの？ そんなの気にしなくていいから。あんたを大学に行かせるくらいの貯金はあるんだから」

玲奈「そうじゃねえよ。私はラップがしてえの。伝説のラッパーになりてえの」

典子「はあ？ なにが伝説のラッパーよ。あんなの駄洒落繰り返してるだけじゃない。ねえ、お父さん」

一徹「まあ思ったよりは難しいと思うぞ」

典子、一徹を睨む。

一徹「すみません……」

典子「あんたねー、日本は学歴社会なのよ。ろくな仕事もしないで路頭に迷ったらどうするの。誰も助けてくれないわよ。私は玲奈のことを思ってるのよ」

玲奈「父ちゃんの方がよっぽど私のこと考えてくれるよ」

玲奈、自分の器から一徹の器に肉を分けてやる。

一徹「いいのか？ サンキュ」

典子「ちよつとどういうことよ？」

玲奈「頭ごなしに否定する母ちゃんは何もわかってねえってことだよ。ラップは駄洒落じゃねえから。ソウルだから。母ちゃんに一生かかってもラップはできないね」

典子「で、できるわよラップくらい！ あんな駄洒落なんかちよちよいのちよいなんだから！ 一週間もあれば十分よ！」

玲奈「（あざ笑うように）じゃあ私にラップバトルで勝ってみなよ。そしたら大学行ってもいいよ」

典子「あんた言ったわね！ なんだかよくわかんないけどそのラップバトルってやつ受けて立つわよ！」

○学校・購買

行列が出来ている。

○同・教室

玲奈、チカとメイと弁当を食べている。

メイ「今日もチカのお弁当可愛いね」

チカの可愛いお弁当。

チカ「そんなことないよ。メイのお弁当だつて可愛いじゃん」

メイの可愛いお弁当。

メイ「うちのは大したことないよー。玲奈のは……」

メイとチカの目が玲奈のお弁当に留まる。

おかずが一切なく白飯に梅干しだけの

日の丸弁当。

チカ「……日の丸、過ぎない？」

玲奈「昨日ちよつと色々あつてさ」

玲奈、気にせず白飯を食べ始める。

○木川田家・玲奈の部屋

姿見に映る、玲奈のストリート系の洋服を着ている典子。ニューエラのキャップやじゃらじゃらとしたネックレス

も付けている。少しも似合っていない。

典子「まずは恰好からよね」

と、何かに目を留める。

机の上にある派手なフライヤー。

向かって来た典子、それを手に取る。

『第7回柏ラップバトルーナメン

ト!』とある。

典子、フライヤーを裏返す。

『presented by MC高尾山』とMC高

尾山(22)の写真が載っている。そ

の下にはツイッターアカウント。

典子「……」

○同・ダイニング

典子、テーブルでノートパソコンに向
かっている。

画面は、ツイッターアカウントの登録
画面。

○ファミレス・店内(夕)

ソファ―席に、玲奈とMC高尾山。MC高尾山の目の前には熱々の鉄板に載ったハンバーグがジュウと音を立てているが、食べようとせずに携帯にじつと目を遣っている。

玲奈「早くソースかけろよ。ジュワツてならなくなるだろ」

MC高尾山「俺、弟子できるかもしれない」

玲奈「は？」

MC高尾山、携帯を玲奈に見せる。

画面には、『ラップを教えてください！』

というツイッターのメッセージ。アカ

ウント名は『得意料理は筑前煮』。ア

イコンはモデルのような美人。

玲奈「得意料理は筑前煮？ 誰こいつ？ やめときなよ。弟子取るほどの実力ねえんだから」

MC高尾山「は？ 今なんつった？」

玲奈「実力ねえんだからやめとけって言ったんだよクソラッパーが」

MC高尾山「(ラップ) Yo! 黙って聞いてりや糞ニート 表に出ろやストリート こいつは弟子の大本命 MCバトルに台本はねえ なあこいつに嫉妬してんだろ してやろうかこいつとワンナイトラブ そしたらこいつとは終わらないな お前との関係は終わっちゃうな」

周りの客の奇異な目。

玲奈「(ラップ) あ? こちとら願い下げだよ なに言ってるかわかんないな 止まないな お前への憎しみ 新しい彼氏との出会い楽しみ つーかくだらねえトークやめろよ 早くハンバーグにソースかけろよ 鼻の下伸ばしてんじゃねえよこのチンパン ジーみてえな一般人が！」

○木川田家・ダイニング(夜)

大皿に盛られた筑前煮。

食卓を囲む、玲奈、典子、一徹。

玲奈「何してんだよ？」

典子、テーブルに置いたガラケーを見つめている。玲奈の言葉に無反応。

一徹「玲奈、今日は筑前煮だぞ。お母さんの筑前煮は美味いからなあ。ほら、温かいうち食べるぞ」

玲奈「無視してんじゃねーよ」
やはり反応しない典子。

一徹「いただきませーす」
と一人食べ始める。

玲奈「さつきからなにずっと携帯見てんだよ。ご飯の時間だろーが」

一徹「お母さんな、そろそろとっても重要な電話が来るそうなんだ」

玲奈「おい、聞いてんのか母ちゃん！」
一徹「玲奈、放っておいてやれ。重要な電話が来るそうなんだ。ほら、食べるぞ」

玲奈「おいババア！」

典子「親に向かってババアとは何よ！」

玲奈「シカトしてっからだろうが！ ご飯の時間なんだからご飯食べるよ！」

典子「この筑前煮を作ったのは私よ！ 私の好きな時間に食べる権利があるわ！」

玲奈「今は家族の団欒だろうが！ じゃあ部屋で電話待てよ！」

と、典子の携帯が鳴る。

典子、急いで電話を取って、

典子「あ、もしもしー。はい、そうです。お電話ありがとうございます」

とダイニングを出て行く。

○コンビニ・レジ（夜）

バイト中のMC高尾山、電話をしていく。客はいない。

MC高尾山「そういう堅苦しい挨拶どうでもいいからさ、結局幾らくれんの？」

とレジを出て自動ドアに向かって行く。典子の声「そうですね、こちらも人妻なもので、高額だと困るんですが」

MC高尾山「まあ俺もラップで食えてるわけじゃねえからデカくはいけねえけどさ、時

給950円以上は欲しいよねえ」

自動ドア付近に貼られた『時給950

円』と書かれた求人募集。

典子の声「じゃあ1000円でどうですか？」

MC高尾山「いいねえ筑前煮さん」

○木川田家・ダイニング（夜）

玲奈「あれ、誰からの電話なの？」

一徹「お父さんもよくわからないんだけど、
なんだか玲奈のためだとか言ってたなあ」

玲奈「……」

玲奈、筑前煮を食べる。

○柏駅・みどりの窓口・前

典子、緊張した面持ちで立っている。

ニューエラのキャップをかぶっている。

と、隣にMC高尾山がやって来る。

典子「！」

MC高尾山、隣にるのが『得意料理

は筑前煮』だとは気付いていない様子。

典子、M C 高尾山の顔を覗き込む。

M C 高尾山「……なんすか？」

典子「いや、あの、何でもないです」

M C 高尾山、辺りをきよろきよろと見渡す。

典子「……あの」

M C 高尾山「だからなんすか？」

典子「M C 高尾山さんですか？」

M C 高尾山「え！？ 俺のこと知ってんの？

そうそうM C 高尾山っす！ うわーっ嬉し

いなマジで。俺もはや有名人なわけ？ 何

で知ってくれたんですか？」

典子「私、得意料理は筑前煮です」

間。

M C 高尾山「ババアじゃねえかよ！」

典子「ちよつと失礼ね！」

○カフェ・店内

ソファ―席に、典子とM C 高尾山。

M C 高尾山「前払い」

典子「今からですか？」

M C 高尾山「当たり前だろ。今、俺の時間がおばさんに費やされているわけ。なんか文句あるの？」

典子「……じゃあとりあえず1時間分」

典子、財布から千円を取り出してM C

高尾山に差し出す。

M C 高尾山、千円札を受け取ってポケットに仕舞い、

M C 高尾山「で、なんでラップ始めようと思っただのよ？」

典子「実は、高校3年になる娘がいるんですが、ラッパーになるから大学に行かないって言い出しました」

M C 高尾山「おばさんがラップやることと何の関係があるわけ？」

典子「ラップバトルで私が勝ったら大学に行くって約束したんです」

○学校・全景

校舎には部活の全国大会出場の如く、
『祝 全国統一模試1位 3年D組
木川田玲奈』という大きな垂れ幕がある。

○同・教室

授業中の教室。

教壇に立つ仲井戸先生。

仲井戸先生「いいかー、この1年間でどれだけ勉強したかでお前らの人生が変わってくるからな。周りのライバルは1分1秒惜しまず勉強しているからな」

玲奈、仲井戸先生の話を全く聞かず、机の下で携帯をいじっている。

画面には、主要大学の学費が掲載されたサイト。軒並み100万を超えている。

玲奈「たっか……」

仲井戸先生「受験は戦争だからな。この戦争に打ち勝たないとお前らはいつまでも負け

組の人生を送ることになるぞ。木川田がなぜ全国模試で1位を取れたかお前らわかるか？ 誰よりも勉強しているからだよ。な

あ木川田」

クラスの生徒の目が玲奈に向う。

玲奈「え？…あ、そうっすねー」

○同・中庭

ベンチなどで弁当を食べている生徒たち。

○同・教室

玲奈、チカとメイと弁当を食べている。

チカ、驚いた様子で玲奈を見ながら、

チカ「大学行かないの！？」

玲奈「勉強したいこともねえし、うち金ねえし」

メイ「勿体無いよー。玲奈ならどこの大学でも行けるんだよ。国立にすればお金かかないじゃん」

玲奈「私立よりはね。それでもやっぱり平気で50万とかかんだよ。私よくわかんねえんだよね。結局大学に何を期待してるわけ？」

チカ「夢のキャンパスライフじゃーん。サークルで旅行したりゼミ合宿行ったり、彼氏作ったりとか」

メイ「チカ、あと文化祭」

チカ「そうだ文化祭もあるじゃん。他の大学の男にナンパされちゃったりしてさー。ほら、楽しいこと一杯じゃん」

玲奈「そのために100万も200万も払うの？」

間。

メイ「……そう言われると何も言えなくなっちゃうけどさ」

チカ「まあでも、玲奈くらい頭良ければ特待生で入学とかできんじゃないの？ そうしたら学費かかんないじゃん」

玲奈「そんな制度あるの？」

チカ「あるでしょ。一般入試の成績上位何人かは全額学費免除とか書かれてるよ」

玲奈「そうなんだ……」

○公園

MC高尾山「いいか、まずラップバトルするのは前もってリリックを用意せずに即興でラップするわけ。リリックとライムの技術が重要なんだよ」

典子「リリックって何ですか？」

MC高尾山「リリックもわかんねえのかよ。」

歌詞のことだよ」

典子「ライムは？」

MC高尾山「韻を踏むことだよ。例えば、

(ラップ)初めての弟子はババアが登場 ト
ランプでいうとこのババ 俺の熱いマイソ
ウルが埋葬 (ラップ終わって)みたいな。
どこがライムかわかるだろ？」

典子「ババアとババ。あと、マイソウルと埋葬」

M C 高尾山 「そう。ライムってのは単に似たような言葉を言えればいいわけじゃなくて、ババアの場合は母音が aaa。これに合わせてババが aa。マイソウルは aiouuu。これに合わせて埋葬が aion。てな感じ。わかる？」

典子 「なんとなくわかりました」

高尾山 「あとはバイブス全開でビートにラップ載せれば……」

と、M C 高尾山、おもむろに携帯を取り出して時刻を確認し、

M C 高尾山 「(手を出して) 1 時間経った」

典子、財布から千円を取り出して差し出す。

M C 高尾山、千円を受け取りポケットに仕舞い、

M C 高尾山 「フローとか縛りとか大事なこと一杯あるけど、とりあえずやってみっか」

典子 「え、もう実践ですか？」

M C 高尾山 「やったもんガチみたいなどこあるから」

○木川田家・ダイニング（夜）

食卓を囲む、玲奈、典子、一徹。

ハンバーガーショップで買ったハンバ

ーガーやポテト、残り物の筑前煮。

音楽番組が映っているテレビ。

玲奈「これ、どう考えても手抜きだろ？」

典子「だったらあんたがご飯作りなさいよ」

一徹「たまにはこういうのもいいかもな。筑

前煮もあることだし」

典子「（テレビに目を遣って、あざとく）

あ！ お母さんこのアーティスト好きなの

よねー。リリックがいいのよねー」

玲奈「！……」

一徹「ん？ リリック？」

典子「歌詞のことよー。お父さんそんなこと

も知らないの？ なんかこのアーティスト

の曲聴いてると、良いバイブスになるのよ

ねー」

玲奈「！……」

一徹「ん？ バイブス？」

典子「やだー、良い気分ってことよー。お父さん古臭いんだからー」

一徹「なんだかお母さん、今日は変だな」

典子「そおかしら？（ラップ）起こす改革打ちにくいのは外角て感じよねー」

玲奈「！…」

一徹「お、おい玲奈、お母さんが脈絡もなくラップをしたぞ」

玲奈「もしかしてラップバトルって本気なの？」

典子「（睨みながら）私が勝ったら、絶対に大学に行ってもらいますからね」

玲奈「…」

○ファミレス・店内

ソファー席に、典子とMC高尾山。

MC高尾山の前にはハンバーグセット。フォークとナイフを手に、ロ一杯に含みながら、

MC高尾山「ラップバトルに出たい！？」

典子「柏ラップバトルトーナメントってある
んですよね？ それに私を出して下さい」

M C 高尾山「おばさん、なに寝惚けたこと言
ってんだよ。まだダメだって。今のあんた
じゃ誰にも勝てねえからな」

典子「どんなものか知っておきたいんです。
時間がないんですよ。内田さんのところの
息子さんも予備校に通い始めたみたいだし。
とにかくお願いします。娘の将来がかかっ
てるんですよ」

M C 高尾山「んな大袈裟な」

と携帯画面を見る。

典子、財布を取り出して千円札を差し
出す。

M C 高尾山、千円札を受け取ってポケ
ットに仕舞い、

M C 高尾山「ダメだって。そんな簡単に素人
が上がる舞台じゃないからね。それより
宿題で出したライムは考えてきたの？」

典子、バッグから大学ノートを取り出

してMC高尾山に差し出す。『ライムノート』と表紙に書かれている。

MC高尾山、受け取ったノートを開く。びっしりと書かれたライム。捲つても捲つてもびっしりとライムが書かれている。

MC高尾山「! : : : あんた、そんなに娘さんに大学行って欲しいの？」

典子「はい」

○柏駅前・ダブルデッキ上（夜）

ラッパー数人、ビートを流して練習をしている。

と、そこに玲奈がやって来て、ラッパー特有の挨拶を交わす。

玲奈「あれ？ 高尾山は？」

ラッパー①「あー、なんか弟子だかなんだかの練習に付き合うとかで今日は来れないって」

玲奈「あっそう…: : :」

ラッパー①「これ来週のラップバトルの組み
合わせ」

と用紙を差し出す。

玲奈「(受け取り)サンキュ」

トーナメントになった対戦表だ。

○木川田家・ダイニング(夜)

玲奈「ただいまー」

と扉から入って来る。

一徹、テーブルで突っ伏している。

玲奈「……何してんの？」

一徹「(突っ伏したまま)自分というものに
絶望しているんだ」

玲奈「は？」

一徹「(顔を上げて)きっとお母さんは月給
32万のたまにしかボーナスの出ないお父
さんに辟易したんだ！ 加えて加齢臭が
年々きつくなる俺は臭い！」

玲奈「何かあったの？」

一徹「玲奈はどう思ってるんだ？ 俺は臭い

のか？ どうなんだ？」

玲奈「父ちゃんは臭えよ」

一徹「臭いのかあー！」

と再びテーブルに突っ伏す。

間。

玲奈「……母ちゃんは？」

一徹「まだ帰って来ないんだ」

玲奈「まだ帰って来てねえの？」

一徹「最近変な言葉を使い始めるし、帰って来るのは遅いし、浮気してるのかもしれないな

いな……」

玲奈「……」

○木川田家・前

典子、玄関から出て来る。頭にはやはりキャップ。足取り良く後にする。

と、少し遅れて玲奈と一徹が出て来て、

典子の行方に目を遣る。

典子の歩いて行く後ろ姿。

玲奈「そんなわけがないと思うけどね」

一徹「とりあえず後は頼むぞ。もし浮気してても絶対に俺には浮気してなかったって報告するんだぞ。俺、ショックで会社辞めちゃうかもしれないからな。約束だからな」

玲奈「じゃあ尾行する意味ねえじゃん」

一徹「いいから行って来い」

と玲奈を押し出す。

○柏駅前・繁華街

典子、歩いて来る。

目深にキャップをかぶった玲奈、典子を尾行している。

玲奈「なんでこんなことしてんだろ」

玲奈、典子を付けていく。

○柏駅前・みどりの窓口・少し離れたところ

みどりの窓口の前で誰かを待っている様子の典子。

玲奈、物陰から典子の動向を窺っている。

と、典子の元に一人の男がやって来て、ラッパの独特な挨拶を交わす。その男の顔はよく見えない。

玲奈「え？…？」

その男の顔が見えると、MC高尾山だ。

玲奈「えええっ！？」

○同・同・前

典子「リリック考えて来たんですけど、見てくれませんか？」

MC高尾山「まあとりあえず飯食い行こ。そこで見るから」

典子「リアルなことの方がいいって言われたので、筑前煮のレシピをリリックにしたんですが」

MC高尾山「うん、だからとりあえず飯行こ。しつこいと時給上げるよ」

と、典子とMC高尾山の前に玲奈が立ちほだかる。

典子・MC高尾山「玲奈！」

典子とMC高尾山、声が揃ったことに驚いて顔を見合わせる。

玲奈「どういうこと？」

典子「別にあんたには関係ないでしょ」

MC高尾山「あれ？ 知り合い？」

玲奈「この人、私の母ちゃん」

MC高尾山「母ちゃん！？」

典子「あんたたちこそ、知り合いなの？」

玲奈「この人、私の彼氏」

典子「彼氏！？」

○木川田家・ダイニング（夜）

テーブルに、玲奈、MC高尾山、典子、一徹。

典子「玲奈、こんなラッパ―野郎とは今すぐ別れなさい！」

MC高尾山「（恐縮して）ラッパ―野郎だなんて言わないで下さいよお、お母さん」

典子「気安くお母さんなんて呼ぶんじゃないわよ！ あんたがラッパ―野郎だからうち

の全国模試1位の玲奈がラッパーになりた
いとか言い出すんじゃない！」

MC高尾山「いやー、まさか玲奈が、あ、玲
奈さんがそんな秀才だなんて思わなかった
ものですから。なんで言ってくれなかった
んだよ」

玲奈「だって言うほどのことじゃねえもん」
MC高尾山「言うほどのことだぞ。だってお
前、日本一だぞ。とりあえずお母さんの言
う通りに大学行っとけよ」

一徹「お母さんは浮気してないってことでい
いんだよな？」

典子「ラッパー野郎の高尾山だってそう言っ
てるじゃない。もっと言ってやんなさい高
尾山」

MC高尾山「まあアメリカだと高学歴なやつ
ってデイスられるけど、日本だとそうでも
ないぞ。売れてるラッパーでも早稲田とか
慶応とか普通にいるし」

典子「ほらほら、もっとだよ高尾山」

MC高尾山「あっはい。まあ大学行きながら
ラップ続けることだって出来るわけだし、
お前の中のヒップホップが確立されていれ
ば問題ねえって話」

一徹「君は高尾山って苗字なのか？」

MC高尾山「あっ本名は鈴木正一っす」

一徹「？」

玲奈「私は大学には行かねえし高尾山とも別
れねえ。私の将来は私が決めんだよ。もう
口出しすんなよ」

典子「あんた、自分で言った約束忘れてない
わよね？」

玲奈「約束？」

典子「ラップバトルで私が勝ったら大学行く
って言ったじゃない」

玲奈「それがなに？」

典子「柏ラップバトルーナメントで絶対に
勝ってやるわ！」

MC高尾山「いやいやお母さんは出ないです
よ。ダメだって言ったじゃないですか」

一徹「ラップバトルってなんだ？」

玲奈「じゃあ私が勝ったら二度と大学のこと

は口にすんなよ！」

MC高尾山「いやいやバトルする方向で進め
んなよ！」

典子「上等よ！ 勝てばいいんでしょ勝て
ば！」

○柏駅・改札（夜）

帰宅客で混み合っている。

スーツ姿の一徹、急いでいる様子で改

札から出て来る。

○ライブハウス・ステージ上（夜）

ラップバトル中。司会はMC高尾山。

ラッパー①「（ラップ）俺の言霊がダサイ？

まさしくそれはお前のことだわ」

フロアから歓声上がる。

○同・前（夜）

走って来た一徹、ライブハウスに入っ
て行く。

入り口に貼られた柏ラップバトルー
ナメントのフライヤーと対戦表。

エキシビジョンマッチとして『レイナ
SMC母ちゃん』と手書きで書き加え
てある。

○同・ステージ袖（夜）

典子、壁に向かってぶつぶつと呟くよ
うにラップの練習をしている。

玲奈「おい、そろそろだぞ」

典子「わかってるわよ」

典子、壁に向かって練習を続ける。

玲奈「……」

○同・ステージ上（夜）

MC高尾山「それではここで、エキシビジョ
ンマッチを行いたいと思います！」

盛り上がるフロア。

MC高尾山「まずは赤コーナー、柏のライム
マシンガン、レイナ！」

玲奈、堂々と袖から現れる。

盛り上がるフロア。

MC高尾山「続いて青コーナー、団塊ジュニア
世代のスーパールーキー、MC母ちや
ん！」

典子、ぶつぶつと呟くようにラップを
練習しながら袖から現れる。

ざわつき出す観客。「誰あのおばさ
ん？」などの声。

○同・フロア（夜）

一徹、階段から降りて来て、ステージ
に目を遣る。

100人ほどの観客が見つめるステー
ジに、玲奈と典子が立っている。

一徹「……」

○同・ステージ上（夜）

MC高尾山「えー、なんと、こちらの2人は
実の親子であります」

驚きの声を上げる観客。

MC高尾山「それでは、先攻後攻を決めるじ
ゃんけんをお願いします」

玲奈「（挑発するように）先攻で！」

フロアから歓声上がる。

MC高尾山「おっと、自ら先攻を選びました。

MC母ちゃん、後攻でいいですか？」

典子、緊張した面持ちで頷く。

MC高尾山、典子のそばにより小声で、
高尾山MC「いいですか。とりあえず黙らな
ければいいですから。スキルでは絶対に勝
てないんで、もうバイブス全開で行きまし
よう。はい深呼吸」

典子、大きく深呼吸する。

MC高尾山「頑張って」

典子、覚悟を決めた様子で頷く。

MC高尾山「さあそれでは先攻、玲奈！」

玲奈「（ラッパ―特有の声出し）ンアンア」

典子「後攻、MC母ちゃん！」

典子、真剣な眼差しを玲奈に遣る。

フロアから玲奈と典子に目を遣る一徹。

MC高尾山「DJユードイ、bring the beat！」

DJユードイ、ビートを流す。

玲奈「(ラップ) Yo! あんたはただの素人

マジで全力で潰す 母親だろうが容赦しな

い レペゼンあなたの子宮から」

フロアから歓声上がる。

玲奈「(ラップ) yeah! あんたは恥だ ス

テージの端で流せよ涙 あんたは私の気持

ちなんて何もわかんねえんだよ! さっさ

と引っ込めわからずや！」

フロアから歓声上がる。

典子「(ラップ) あんたの気持ち? わから

ない 私の気持ち? 変わらない ステー

ジの端で流せよ涙 私は負けない崇めよ神

だ！」

フロアから歓声上がる。

典子「(ラップ) 私は絶対諦めない 行くん

だ大学起こせよ改革 どうだ私だってラップできるぞ 私が勝って受験は確定」

フロアから歓声上がる。

驚いた表情のMC高尾山。

玲奈「(ラップ)びっくりしたぜ 確かにあんたのラップは様になってる だがあんたは限界 誰もが認める私は天才 晒しもんだぜあんたの正体 わかってるぜあんたは変態」

フロアから歓声上がる。

玲奈「(ラップ)つーかちよっとラップやっ
たくらいでわかった気になってんじゃねえ
よ！ 私は死ぬ気でラップやっただよ！」

フロアから歓声上がる。

典子、ラップをする番なのに黙ってしま
まう。

ビートだけが流れる会場。

MC高尾山「(小声で)なんでもいいからラ
ップして下さいっ！」

典子「……(語りで)私だって本気であんた

のことを思ってる！」

玲奈「……」

典子「良い大学出て、良い仕事して欲しいって本気で思ってる！　でもあんたが本気なら好きにすればいいよ！　ラップを頭ごなしに否定して悪かったよ！　アイムソーリーチエケラッチョ！」

典子、不恰好なチエケラッチョポーズを真剣な表情で決める。

MC高尾山「……しゅ、終了ー！」

玲奈「……」

一徹、一人拍手を送る。

一徹の拍手に釣られて徐々に喝采に包まれる会場。

○居酒屋・座敷（夜）

典子、ラッパーたちに煽られてビールを一气飲みする。

明らかに蚊帳の外だが楽しそうな一徹。

玲奈とMC高尾山、少し離れた席から

その様子を眺めている。

MC高尾山「すっかり馴染んでるぞ」

玲奈「そういう人だから」

MC高尾山「それにしてもお前のお母さんの

1回目の返しは痺れたな。あのときはマジ
でお前負けんじゃねえのって思ったわ」

玲奈「私が負けるわけねえだろ」

MC高尾山「でもわかったろ？」

玲奈「何が？」

MC高尾山「お前への思いがフェイクじゃない
くてリアルだってことだよ。じゃなきゃ初
めてのバトルであんなにつけえラップでき
ねえだろ」

玲奈「（典子を見ながら）……」

楽しそうにラッパーたちと談笑する典
子。

○学校・全景

○同・進路指導室・前

『進路指導室』と書かれた扉上の札。

○同・同・内

席に着き、何かの用紙に目を落として
いる中島先生。困ったなあ、といった
様子で頭をぽりぽり。

と、ノックもなく扉が勢い良く開き、
玲奈が現れる。

玲奈「なに？」

中島先生「まあとりあえずここ、座ってよ」

玲奈、つかつかと歩いて来て、中島先
生の向かいに座り、

玲奈「で、なに？」

中島先生「あー、これなんだけどね」

と用紙を玲奈の前に置く。

進路希望調査表だ。第1希望から第3
希望まで、『ラッパ』とだけ書かれ
ている。

中島先生「こうなるとこっちはいそうです
か、とはいかないんだよ。ましてや全国模

試1位だしさあ。別にラッパーになることを否定しているわけじゃないんだよ。立派なことだと思う。だけど、やっぱり」

玲奈「（遮って）何百万も払って大学行くとか馬鹿だなーって思うんだよね」

中島先生「え？…ああ、そうか」

玲奈「ただ、家族も大事だから、心配させたくねえなーって思うんだよね」

中島先生「え？…ああ、そうか」

玲奈「だから特待生で入学できるように本気で受験勉強するよ」

先生「え？…ああ、そうか。おお、そうか！」

○同・同・前

進路指導室から出て来た玲奈、清々しい表情でその場を後にする。